



Batesonのredundancy概念についての実証的検討： 会話における了解成立への寄与という観点から

多田, 幸子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(2):15-25

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003900>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003900>



Bateson の redundancy 概念についての実証的検討 —会話における了解成立への寄与という観点から—

Empirical Research about Bateson's Redundancy Concept

—From the Viewpoint of its Contribution to Understanding in Conversation—

多田 幸子*

Sachiko TADA *

Bateson(1972)によると、発話に付随し、メタ・レベルでやり取りされる非言語の情報である redundancy を捉えることで話者相互の暗黙の了解が成り立っている。しかしその了解成立プロセスについての実証的な研究はこれまで行われていない。本研究は、セラピストがクライアントとの会話の進行において「立ち止まるべきところ」(土居, 1992)をどのように探り当てるべきかという問題意識をもとに、暗黙の了解成立への redundancy の寄与について、会話規則の「隣接ペア」を手掛かりに実証を試みたものである。方法としては、日本人と外国人のペア 10 組による会話実験を行い、内容を VRM 発話分類(Stiles, 1992)に基づいてコーディングした。その際、発話されない部分における redundancy を補足した逐語録を作成し、発話のみを見た場合の逐語録との間で隣接ペアの成立率を比較した。その結果、隣接ペアの成立に redundancy が大きく関わっていることが示された。また、その成立のしかたに各ペアの関係性の特徴が表れていることも明らかになった。redundancy に埋め込まれた了解の構造を踏まえて会話することが、セラピストにとっても重要なのではと考えられる。

キーワード: redundancy, 会話, 暗黙の了解, 隣接ペア

注) 文中表記について。「redundancy」は引用文献によっては「冗長性」という訳語が用いられている場合があり、その場合は訳語のまま引用している。

1. 問題と目的

1.1 カウンセリング会話における「了解」

土居 (1992) は、カウンセリングなどの精神科的面接において「日常の意味を越えて」相手を理解するためには、「簡単にわかってしまっただけではいけない」「いいかえれば何がわかり、何がわからないかの区別がわからねばならない」とし、「わからない、不思議だ、ここには何かがあるかわからない」という感覚を獲得することが (セラピーの)「勘所」であると述べている。すなわち日常ではお互いが“いちいち説明しなくても (尋ねなくても) わかっている”と思ひこみ、了解が進行していくであろう場面であえて立ち止まり、“わからないところ”を俎上に載せるのがセラピストの役割と言える。しかし初心者は得てして会話の流れに巻き込まれ、「簡単にわかってしまっただけではいけない」はずの箇所を見逃してしまう。立ち止まるべき箇所を見極めるためには、一見何気なく進行する会話において、話者間の 1 つ 1 つの了解がどのようになされていくのか、そのプロセスを丁寧に検証してみる必要がある。本研究では Gregory Bateson の redundancy 概念に着目し、話者間の了解が成立するプロセスにメタ・レベルのメッセージである redundancy がどのように寄与してい

るのか、及び、その結果会話がどのように進行するのかについて、実験を通じ検討を行った。

1.2 redundancy 概念とは

Bateson は、Russell の論理階型理論をもとに、会話において表示レベルのメッセージとメタ・レベルのメッセージとの慢性的な不連続性が精神的な病理を生むとしたダブルバインド理論を提唱し (Bateson, 1972 佐藤訳 2000)、家族療法を实践したことで知られる。発話に付随しメタ・レベルでやりとりされる非言語の情報を Bateson は redundancy と呼び、「コミュニケーションとは、redundancy とパターンを生み出すことである」(Bateson, 1972 佐藤訳 2000)というテーゼを述べた。

redundancy はもともと工学分野の用語で、ある情報を表すのに必要以上の情報を用いることをいう。一見余分に見えるが、故障や劣化に備える予備機能や、目標以外の変数も同時に扱える融通性など、1 対 1 の単純な対応だけでは得られない「含み、ゆるみ、余幅」として重要な働きをする。この用語を借り、Bateson は話者間で言語化されないまま意味が了解されていく、いわゆる“暗黙の了解”に相当する部分を、メッセージに付随する「余幅」=redundancy と捉えて概念化した。

redundancy は聞き手が話し手の発話の意図を、言語化による確認を経ないまま一方的に推測する内容とも言えるが、Bateson によるとそうした推測が可能になるのはコミュニケーションにおいてパターンが存在しているからである。英語のある文字列のある位置に k が登場するのはランダムな出来事ではなく、組み合わせ上、そこに

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2011年9月30日 受付)
(2012年1月16日 受理)

くる文字の可能性を絞り込むパターン化の作用が働いているのである。それゆえ受け手は、k の文字が欠けたメッセージを受け取ったとき、欠けているのがk だということをランダム以上の確率で推測できる。こうした「パターン卓越の程度」、言い換えれば「出来事の集団の中である特定の出来事が起こる予測の容易さの度」を redundancy と呼ぶ (Bateson, 1972 佐藤訳, 2000)。Bateson はこの用語を拡張し、人と人との関係性のパターンの中でやり取りされる、相手についての予測を含んだメタ・メッセージを redundancy と概念づけたのである。

人と人との会話は、文字や数字の列のような単純なパターンだけで成り立っている訳ではない。「何が話されたか what is said」と「何がなされたか what is done」とが解釈 interpretation と産出 production の規則によって発話行為として結び付けられ、さらに複数の発話行為が配列の規則 sequencing rules によってつなげられることでディスコースの一貫性が生まれる (Labov&Fanshel, 1977)。このことから本研究では、言葉を意味のまとまりとしてのディスコースに組み上げる会話の構造に着目し、そのパターンから言語化されていない redundancy を読み取ることを試みた。

1.3 redundancy 概念と会話規則との親和性を用いた先行研究

広く社会で用いられている会話の構造パターンは会話規則として見出されていることから、パターンによる推測である redundancy はこの規則と親和性が高い可能性が考えられた。花田 (2010) は、会話規則の 1 つである「ターンテイキング (話者交替)」に注目し、ターン配分の自由度からその会話の redundancy を計算し、話者同士の関係としてのパターン pattern as a relation の記述を試みている。ターン配分とは、会話におけるターン (発話権) を誰がどのようなテクニックを用いて獲得するかについての規則であり、たとえば、「話し手は、少なくとも 1 つのターン構成単位が完結するまで話すことへの権限を持ち、最初のターン構成単位の最初の完了可能点が最初の「話者移行適格場所」を構成する」、「ターン配分テクニックは、現在の話し手が次の話し手を選択するテクニックと、次のターンを配分されることになる者が自らどの聞き手よりも先に話したテクニックとに分かれる」(榎本, 2009) といったシステムを構成する。花田 (2010) は、ターン配分は「相互作用への参加のありかたを描き出しうる」(花田, 2010) として、各会話ペアの属性 (初対面か友人同士かなど) や場面特性 (葛藤場面か否かなど) に応じて redundancy の量にどのような差が生じるかを調べ、会話の [硬直性 - 柔軟性] として記述している。これは「Bateson らによるコミュニケーション理論が果たした貢献のうち、特に、情報理論の冗長性概念の数学的定義の側面に光を当てた」(花田, 2010) 研究である。

一方で Bateson は、彼の redundancy 概念は情報工学の用語としての redundancy とは異なり、「意味」を含んだものであるとして次のように述べている。

「受信者がメッセージの欠落部分を推定できるというのは、すでに受信した部分が、まだ受信していない部分について何かしら言及しているから、それについての情報を運んでいるからである。さらにいえば、それについての意味を運んでいるから、である。」(Bateson, 1972 佐藤訳 2000 傍点は原文のまま)

本研究ではメタ・メッセージとしての redundancy の「意味」の側

面を捉えるべく、ターンテイキングと並んで重要とされる会話規則である「隣接ペア」に着目した。

1.4 隣接ペア

隣接ペアとは、「問いと答え」「挨拶と挨拶」「要請・招待と、受諾・拒絶」といった、対としてとらえられる 2 つの発話を言う。具体的には、「おはよう／おはよう」「～ですか？／はい (またはいいえ)」といった組み合わせのことを指す。ペアの片方としての第 1 部分が発せられたならば、次の話者の発話は必然的に第 2 対偶成分となり、第 1 部分が属しているのと同じ対偶類型から選択される、つまり先行する発話が次の発話のあり方を特定するという関係である。隣接ペアが用いられるのは、会話において、何らかの望まれている出来事がともかく起こることを保証し、また望まれている出来事が「いつ」生起するかということそれは「次」なのだ、ということを確認するためである (Schegloff&Sacks, 1972 北澤・西阪訳 1995)。受け手側は、隣接する成分を構成することで、発信者側の意図や内容を理解したこと、あるいは話し手に同調していることを示すことができる。一方、発信者側は、自らの意図、内容が理解され受け入れられたかどうかを、受け手による第 2 成分の生起から知ることができる。自らの発話が了解・誤解・訂正されたことなどを理解できるのは、隣接した発話の位置関係を利用することによってなのである (Schegloff & Sacks, 1972 北澤・西阪訳 1995)。さらに伝 (2009) によると、第 2 部分が生じなかったとき、それは生じるべき何かが生じなかった不在として聞かれる。つまり隣接ペアは、第 1 部分 (成分) が生じた時点でその後生じるはずのものを予測／投射的に認定するものである。また意見や主張のように第 2 部分を条件つけない発話は、隣接ペアの構成要素とは通常みなされないが、意見や主張に後続する発話が対を構成するように見える場合は、隣接ペアと同等に扱われることが多い。

以上のような点から、ターン配分が関係性の自由度 (拘束度) という redundancy の量的側面を測る手段になりうる (花田, 2010) のに対し、話者同士の関係のあり方を示し、かつ予測可能性を織り込む会話規則である隣接ペアは、話者間の暗黙のやり取りという redundancy の質的側面を説明する手段になりうるのではないかと考えられた。

1.5 本研究の目的

本研究では会話中に発話されない箇所において redundancy がどのような「意味」を運んでいるかに着目し、会話規則の隣接ペアを手掛かりに、話者間で「暗黙の了解」が成立するプロセスについての仮説生成を試みる。方法としてはビデオ収録した会話データをもとに、発話のみの逐語録と、文脈から redundancy 部分を推定補足した逐語録とを作成し、Stiles (1992) の会話分類に従って両者の構造分析を行い、隣接ペア成立率を比較する。話者間の関係性が構造パターンとして redundancy にどのように反映され、「暗黙の了解」が成立していくのかを明らかにしたい。以上の研究成果は日常会話の進行経緯を微細に解明するとともに、カウンセリング会話において、セラピストが「わかったつもりにならずに立ち止まる」べきポイントがどこなのかを自覚するためにも有用な基礎的知見を提供するものと考えられる。

2. 方法

21 データとしての多文化間会話

redundancy はあらゆる相互行為場面に遍在しており、我々はそれをその場その場の関係性のコンテクストマーカ―として捉えている。しかし当該の会話のどこでどのような redundancy が捉えられたのかを会話の部外者である実験者が判断するにあたっては、客観性の点から、メタ・レベルのやり取りが行われている状況が発話上からも確認しやすいデータを得ることが望ましい。本研究では基礎研究として redundancy の捉えられ方を抽出するにあたり、発話だけでは対処しきれない事態が生じ、双方の話者が意思疎通のために redundancy による推測を用いざるを得ない場面というものを設定することを考えた。その典型例として、文化・社会の共有度が低く対人関係の枠組をメタ・メッセージとして伝える「会話スタイル」が異なり互いに居心地の悪さを感じる (Tannen, 1983, 1986) とされる多文化間コミュニケーションに着目し、日本人大学生と留学生との会話を実験データとして用いることとした。母国語でない言葉で会話をすると、つまずきや遅延、誤用、誤解といった言語トラブルが生じやすい。母国語使用者の側も相手のトラブルに巻き込まれたり、あるいはそれを助けたりと、想定外の事態に遭遇する可能性が高くなる。そのようなトラブルは外見上発生が特定できる場面であり、またトラブルに対してどのような対処が行われたかを観察することで「どのような redundancy が捉えられたのか」についても実験者が把握しやすいと言える。redundancy が含まれる微細部分がより明らかになることを期待し、多文化間の会話を分析対象とした。

22 会話課題の選択

①会話の目標が明確で、初対面どうしても短時間で取り組める簡単な課題であること。②一方の文化的背景や知識に偏ることなく日本人と外国人とが対等に取り組める課題であること。③会話の成果を第三者（実験者）が容易に確認あるいは推測できる課題であること。以上の点を考慮し、次のような課題を採用した。

「一見すると何に使うのかわからない“生活便利用品”6点を実験協力者に示し、それぞれが何に使用される物か、どのように用いられる物かについて話し合ってもらおう。」

23 実験デザイン

一実験の概要

日本人と外国人のペア、計10組20人に会話課題を与え、承諾を得た上で各組10分間の会話をビデオに収録する。終了後、日本人と外国人それぞれに対して実験者がフォローアップ・インタビューを実施する。会話の展開のしかたを比較しやすくするため、提示した6個の品物のうち同じ1個についての会話部分を各組の会話から抽出し、分析対象とする。

一実験協力者

①日本人大学生及び大学院生10名、②日本語レベルが初級～中級（自己申告による）の外国人留学生10名。全組とも初対面どうしである。

一実施時期

2008年11月上旬

一実施場所

神戸大学心理教育相談室内面接室A・B

一準備物

生活便利用品6点、ビデオカメラ、三脚、ストップウォッチ、パソコン、画用紙、鉛筆、消しゴム

一手順

- ①面接室Aを主たる実験室とし、ビデオカメラを設置。応接セツトの中央テーブルには画用紙と鉛筆を用意した。
- ②実験者がまず外国人協力者を面接室Aに案内し、「テーブルの上に6つの品物があります。私が退室し、もう一度入ってくるまでの10分間に、それぞれがどういう目的でどういう使い方をする品物か、パートナーと2人で話し合ってください。使う言葉は何語でも結構です。画用紙や鉛筆もありますので言葉以外のどんな手段、何を使ってもかまいません。時間内に全ての話し合いが終わらなくてもかまいません」という指示を行う。日本語が通じにくい場合は英語で指示を行った。
- ③日本人協力者には別途、面接室Bで同様に指示を行う。
- ④実験者が日本人協力者を面接室Aに案内し、2人を引き合わせる。向かい合って着席してもらい、会話開始の合図と共に実験者は退室する。
- ⑤10分後、実験者がドアをノックして入室、会話はその時点で中止とする。
- ⑥日本人協力者を面接室Bに移動させ、質問紙に記入してもらう。
- ⑦外国人協力者には面接室Aで質問紙に記入してもらい、会話の感想を聞くための半構造化面接を実施。
- ⑧日本人協力者には録画データの文字起こしを依頼し、後日その資料をもとに会話の感想を尋ね、さらに実験者がデータを見て不明だった点について質問し、答えてもらう。

24 分析方法

一redundancyの評定方法

Bateson (1972 佐藤訳 2000) は redundancy が観察される箇所について、

「なんらかの出来事または物の集合体に、とにかくなんらかの方法で「切れ目」を入れることができ、かつ、そうやって分割された一方だけの近くから、残りの部分のありさまをランダムな確率より高い確率で推測することができるとき、そこには冗長性またはパターンが含まれることになる。」(Bateson, 1972 佐藤訳 2000, p. 203, 傍点筆者)

と述べている。本研究では会話の「切れ目」として話者交代時に着目し、交代の前後で相手の発話についてどのような推測がなされたかについて解釈した。すなわち話者A、Bによる会話の中で、「①話者交代の前後において、②Aの発話に何らかのメッセージの欠落があつてあいまい性が高い場合に、③受け手であるBが推測によってその欠けた項目を補い、④③の推測に沿った発話応答をBがAに返している」と判断される箇所について redundancy が含まれると評定し、その内容を解釈した。発信者の発話に欠落があつてもそれに対して受信者が何の応答もしていない場合は対象外とした。「発信者、受信者ともに身振り・動作などの非言語表現のみでやりとりしている場合」においても redundancy は含まれていると考えられるが、身振り・動作は多義的で、解釈において分析者の主観が入る余地が大きくなりすぎる。そのため発信者の非言語表現に対して「受信者側からの発話応答があつた場合」のみを分析対象とした。また発信者

側の発話に対して受信者が非言語表現で応答した時には、「非言語表現の意図が第三者にも明白な場合」についてのみ解釈に含めることとした。

ーVRMによるカテゴリー化とコーディング

発話及び redundancy として捉えられるメタ・メッセージの意味の解釈にあたり、ロジャーズ派の心理学者 Stiles (1992) が開発した Verbal Response Modes (以下、VRM と表記) のカテゴリーを用いた。VRM の特色は、語用論における発話の力 illocutionary force の観点に基づき、1つの発話について、文法上の形式(form)と実用的意味(pragmatic meaning)の両面を評定することである。VRM はもとはカウンセリング会話の構造分析のために発案されたが、カウンセリング以外のあらゆる内容の発話分析に適用可能であること、明確なカテゴリーの定義が存在するため1つの発話を必ず1つのカテゴリーに分類できること、またカテゴリー間の類似点や相違点なども理解しやすいといった点で他の発話分類よりも優れているとされる(小川, 2008)。本研究に関してはメッセージの機能(「形式」と「実用的意味」)に着目し記号化して捉えるという VRM の抽象性が、語義ではないメタ・レベルに属する redundancy の“意味”を解釈するためには有効ではないかと考えられた。VRM では分類した結果を「形式」と「実用的意味」をそれぞれ表すアルファベットの略称2文字で表記する(コーディング)。例を挙げると、“I have a pain when I move my legs.” は、文法上の形式も実用的意味もどちらも Disclosure と分類され、DD となる。“Would you open the window?” は、文法上の形式は Question であるが意図においては依頼を伝える Advisement と分類され、QA と表記される。以下に VRM の分類表を掲げる。訳語の一部は小川(2008)にならった。

Table 1 Verbal Response Modes の分類 (Stiles, 1992 より)

発話内容を経験したのは誰か	誰の経験であると推測しての発話か	誰の参照枠による発話か	
		他者	話者
Other (他者)	Other (他者)	Reflection (反射) 表記: R	Interpretation (解釈) 表記: I
	Speaker (話者)	Acknowledgment (応答) 表記: K	Question (質問) 表記: Q
Speaker (話者)	Other (他者)	Confirmation (確認) 表記: C	Advisement (指示) 表記: A
	Speaker (話者)	Edification (情報) 表記: E	Disclosure (開示) 表記: D

ー発話のコーディング

発話は、発生順序を示す数字(01~)で表記し、「形式」と「実用的意味」をそれぞれ示すアルファベット2文字でコーディングを行う。同じ話者による連続した発話単位は「/」で区切って示す。話者交代場面は「→」で示す。

ー非言語表現(身振り・動作、笑い声)のコーディング

非言語表現については Bateson (1972 佐藤訳 2000) が言及している“SN (比)”, すなわち情報の総体を Signal (意味ある信号) と Noise (雑音) に分別するという考え方を導入し、会話課題遂行上明らかに有効であったとみなされる身振り・動作、笑い声のみを“Signal (S)”として分析対象とすることにした。身振り・動作、あるいは笑い声といった非言語表現は多義的で、単純に1対1で言語に置き換えることはできない。しかし、受信者が発信者の非言語表現をどう捉えたかを何らかの言葉によって表現したならば、その言葉を手掛かりに、受信者が汲んだ意味を第三者が推測することは可能と考えられる。以上を前提として本研究では、非言語表現である身振り・動作、笑い声に関して次のような表記を行った。

- 1) データにおいて身振り・動作は“Signal”を意味する S と発生順序を示す n を組み合わせ、Sn と表記する。カテゴリーについては、身振り・動作はあいまい性が高く VRM で明確に分類することができない。その代わり、◎という記号を記載する。
- 2) データにおいて笑い声は“Laugh”を意味する L と発生順序を示す n を組み合わせ、Ln と表記する。カテゴリーについては、あいまい性の高さゆえ VRM で明確に分類することはできない。その代わり、※という記号を記載する。

ーredundancy 箇所のコーディング

redundancy が捉えられていると考えられる箇所については以下のように分析作業を行った。まず Labov & Fanshel (1977) にない、実際には発話されなかった内容を前後の文脈から実験者が補うことでメッセージのコンテキストを完成させる。すなわち、実験者が A の未完成の発話とそれに対する B の応答の双方向から、B が推測したであろう内容を判断して補い、言語化して欠落部分にはめ込む。

実験者が言語化した部分はデータには X という記号をあてはめて記載するが、直前のどの発話の redundancy から推測されたかを示すために、nX (n 番目の発話から生じた redundancy) と表記する。直前のメッセージが非言語表現であった場合は SnX (n 番目の Signal から生じた redundancy), あるいは LnX (n 番目の Laugh から生じた redundancy) と表記する。さらに redundancy 箇所であることを強調するために[]で囲んで表記する。例:[10S5X]は、発話の10番目とシグナルの5番目によって導かれた redundancy であることを示す。

redundancy 部分のコーディングについては、補完した部分は実際には発話されていないので「文法上の形式」は存在せず、従って VRM カテゴリーは「実用的意味」を示すアルファベット1文字のみで表記し、発話のコーディングと区別するために<>で囲んで記載する。さらに直前の発話ないし非言語表現から導かれていることを示すために+を付記する。例:EE+<Q>は、Q の実用的意味を持つ redundancy が直前の発話 EE によって導かれたことを示す。

ー隣接ペア成立率の比較

本研究の目的である、redundancy が“話者どうしの了解確認行為”にどのように寄与しているのかを測る指標として、当該会話における隣接ペアの成立率を調べた。

- ①「発話」、「非言語表現」、「redundancy による推測部分」のそれぞれのコーディング結果から、話者交代時に隣接ペアが成立しているかどうかを判断し、成立箇所を分析シート上に「◆」の記号で

示す。

②特に、以下の点に着目する。発話のみの応答を見た場合と、発話に「非言語表現+redundancyによる推測」を加えて見た場合とで隣接ペア成立率を比較する。成立率があまり変わらない場合は、話者は発話された言語メッセージに多く依存して会話を行っていると考える。発話のみを見た場合と比較して「非言語表現+

redundancy」を加えた場合に成立率が増加している場合は、話者は発話とは異なるメタ・レベルのメッセージを多用して会話を行ったと言える。

以上のコーディング内容を Table 2 として一覧表に示しておく。

Table 2 データのカテゴリ化とコーディングの一覧

分析・解釈の視点	記号	備考
1) 発話のカテゴリとコーディング (VRMによる記号化)	①文法上の形式 R (Reflection) K (Acknowledgement) ②実用的意味 I (Interpretation) Q (Question) C (Confirmation) E (Edification) A (Advisement) D (Disclosure)	1 発話につき、①と②のそれぞれについてR～Dのどれかに分類し記号化する ex) 文法上の形式がQで実用的な意味がEの場合、その発話はQEと記号化される
2) 身振り・動作・笑い声のコーディング	身振り・動作 S(Signal) →Sn 笑い声 L(Laugh) →Ln	S, Lそれぞれに発声順序に基づき番号を添える ex) S1, S2・・・ L1, L2・・・
3) redundancyのコーディングと解釈	X VRMによる実用的意味の記号化 (但し◇で囲む) R (Reflection) K (Acknowledgement) I (Interpretation) Q (Question) C (Confirmation) E (Edification) A (Advisement) D (Disclosure)	発話を受けての場合 発話番号を前置する (nX) ex) 1X, 2X, 3X・・・ 身振り・動作を受けての場合 (SnX) ex) S1X, S2X, S3X・・・
4) その他	◆ (隣接ペア) ／ (同一話者の連続発話) → (ターン(会話交代)) ◎ (身振り・動作) ※ (笑い声)	

3. 結果

3.1 実験結果

各ペアにおいて特に注目すべきやり取りを記す。点線部分は後述する仮説の根拠とした部分、実線部分は各ペアで観察された redundancy の捉えられ方を示す。文中の J1 は第 1 ペアの日本人、F1 は第 1 ペアの外国人留学生を表す (以下同様)。

第1ペア

J1 : 日本人大学院生 (女性), F1 : 留学生 (男性)

「発話+非言語, redundancy」で見た場合は「発話のみ」で見た場合と比べて隣接ペア出現率が 30.3 ポイント増加しており、この数値は 10 組中 2 番目に多い。すなわちこのペアは、非言語表現や redundancy に頼って了解しあうことが多かったと言える。

[場面 1]

10 S5 [10S5X] 11 S6 [11S6X] 12 13
EE/◎ +<A> → EE/◎+<Q> → KC → EE
◆ ◆ ◆
[13X] 14
+<Q> → KC

F1 は 10 「でもなにか熱いものを、あの・・・」EE と、不完全な

まま塗切れる。しかし、S5 : 何かをはさんで持つしぐさをするという身振り表現を加えたことで受け手の J1 は、『言いたいことをわかってほしい』<A> というメッセージを redundancy として捉え、11 において「持ったり」EE と発話し、10 の未完成な部分を補って完結させている。J1 はその補い方が正しかったかどうかを確認するかのよう

に、S6 : F02 の顔を見る という動作表現をし、その意図を汲んだ F1 は 12 「うん」とうなずいて肯定している。次に J1 は「あーなべつかみみたいなの」EE と発言する。F1 はそこに 13X : 「なべつかみみたいなのだろうか?」<Q> という質問の意図を捉え、「うん、そうかな」KC の返答を返している。すなわち、ここでは一方の発した不完全な文をもう一方が補うという協同作業が見られ、さらにそれが成功したかどうかの確認が、redundancy を通じて行われていると言える。

第2ペア

J2 : 日本人大学院生 (女性), F2 : 留学生 (女性)

会話時間が 36 秒と 10 組中最も短く、発話数も 11 と最も少ない。一方隣接ペア成立率は、「発話のみ」の場合と「+非言語, redundancy」の場合の両方において高い。このことは、短い時間と少ない発話の多くが隣接ペアによる「確認・了解」の作業に割かれたこと、そしてその「確認・了解」は、言語のレベルでよく表現されていたこと

ーン(話者交代)数と隣接ペア数の両方が増加していることから、

言語に加えて、言語以外の表現でも頻繁に“確認・了解”のやりとりがなされたことがわかる。具体的に見ると、

02 03 04 S2 [04S2X] 05 S3 [05S3X] 06 S4 [06S4X]
KK/EE/EE/◎+<Q> → RQ/◎+<Q> → DE/◎ +<Q>

07 S5
→ QI → ◎

02 から S5 に至るやりとりの全てに redundancy による推測が用いられ、隣接ペアが成立している。04 は「かぎ・・・鍵」という 1 名詞の返答をしている。これも EE ではあるが、そこに S4 = J2 の顔を見る = という動作が加わることで、受け手の J2 は再び『あなたの意見はどうか?』という<Q>の redundancy を捉えた。そして“鍵”という発想について想像をめぐらせたあげく、07「あーかけるやつのこと?」と自分の解釈を述べるとともにそれが正しいかどうか相手に確認している (QI)。それに対し F2 は S4 : = 少しくなずく = と肯定している。02 から S5 までの所要時間は、22 秒であるが、その短い時間に隣接ペアが 4 箇所 (うち redundancy による推測にもとづくものが 3 箇所) 用いられ、“確認・了解”が交わされている。すなわち、ほとんど 1 語ずつの短いやり取りであっても、redundancy による推測がそれを補うことで了解は達成されていくことが示されている。

第3 ペア

J3 : 日本人大学院生 (男性), F3 : ブラジル人留学生 (男性)

「発話のみ」の場合と、「+非言語, redundancy」の場合の両方において、隣接ペアの成立率が 10 組中最も低い。redundancy の箇所も 2 箇所と 10 組最も少ない。この点に関し終了後のインタビューにおいて、J3 から興味深い報告が得られた。それは、「僕は課題の 6 品を一目見て、ほとんどの品が何なのか、すぐわかった。しかし F05 が真剣に考えようとしているのでそれに付き合おうと思った」というものである。つまり、すでに答えがわかっている J3 には“確認しあって会話を進める”という作業は不要であり、「F3 に付き合おうと思った」とはいうものの結果的には自分のわかっている答えに誘導することになり、F3 側はその誘導に反応したり納得したりする、という一方的な関係が生じていたのである。

08 09 S4 10 11 12 13 S5 14 S6
EE/QE/◎ → KC/KC → KC → ED/◎/EE/◎

15 16 S7 17 18 [18X] 19
/CC/EE/◎/CC → EE +<Q> → EC

J3 は、08 と 09 において、「あ、と、滑り止めがついているから」「熱いものをこう…持つ、んですかね?」と、画用紙をはさむという動作表現 (S4) も加えて“なべつかみ”という正解に F3 を誘導しようとしている。それに対する F3 の応答は、10「ああ」KC、11「ああ、そー…」KC であるが、J3 はさらに 12「ですかね」KC と念を押す。それに対し、F3 は 13 から 17 にかけて、「ああそゆこと…熱い皿とか。ああそうね。オープンの中で…ああそうね」と発言しているが、これはあたかも自分に対して言い聞かせるモノローグのようである。J3 は 18「じゃないですかね」と重ねて言い、F3 は 19「んー多分ね」EC と返答する。これらのやりとりは意見を交換する

というよりは J3 からの一方的な説得の様相を帯びている。すなわち、話者の片方が会話の“正解”ないしは“ゴール”をあらかじめ知っている (あるいは知っていると思っている) 場合、“確認しあう、了解しあう”という作業は少なく、片方の“説得・誘導”に対する他方の“納得・同意”といった一方的な関係が生じやすいと言える。

第4 ペア

J4 : 日本人大学生 (女性), F4 : 留学生 (女性)

秒あたりターン数が、「発話のみ」の場合に 0.31, 「+非言語, redundancy」の場合に 0.36 と、どちらも 10 組中最も多い。これは、頻繁にターン (話者交代) がなされた、つまりやりとりが活発であったことを示している。また、会話内容を見てみるとこのペアの間では、同調が多いことが観察された。

06 07 08 [08X] 09 [09X] 10 11
QQ/EE → QI +<E> → EE +<E> → KK → KK →

12 S3 [S3X] L1 L2
QQ → ◎ +<D> → ※ → ※

06 から L2 にかけてのやりとりは、06/07「これマグネット?…: : : じゃない」08「じゃない?」09「じゃない」10「うーん」11「うーん」12「これ何だ…?」L1<笑い>L2<笑い>であり、両者が同じ言葉 (「じゃない」)、同じ非言語表現 (笑い) を発している。これは、双方が理解しあっていることを示す同調行動 (Hardin&Higgins, 1996) と考えられるが、その際、08 と 09 では「じゃない?」「じゃない」だけのやりとりとなっている。これは、redundancy による推測を用いて“マグネット”という発話を省略してもわかり合うことができ、そのためより早いやりとりが可能になり、同調効果を高めていると考えられる。省略が行われるということは、「省略しても通じるはず」という相手との信頼関係を意味し、さらには省略行為を行うことで関係を確認し、強化しているとも言える。

第5 ペア

J5 : 日本人大学院生 (女性), F5 : 留学生 (男性)

「発話のみ」の場合の隣接ペア成立率は 22.7% とほぼ平均に近い数値である一方、「非言語+redundancy」で見た場合の成立率の増加は 9.1 ポイントと低い。これは、主に言語に頼って確認・了解が進行したことを示している。

redundancy にもとづくやり取りの中では、特に以下の場面を指摘しておく。

18 S4 [18S4X] 19 [19X] 20 21 S5 [21S5X] 22
EQ/◎+<A> → QR +<Q> → EC/DD/◎ +<A> → DE/

23 L4
QK/※

F5 は 18「こちらの、あの、」EQ と言いかけ、その後の部分は S4 : = 裏の磁石部分を指さす = という身振りで示している。この意図を redundancy によって『日本語で何と言うのかわからないが動作でわかってほしい』<A>と捉えた J5 は、19「磁石?」と手助けしている。その発言に含まれる『あなたの言いたいことはそれでよいか?』<Q>という J5 からの確認のニュアンスをとらえた F5 は、20「磁石」KC と肯定の答えを返して、ここで両者の了解が達成されて

いる。ところがF5は引き続き、21「磁石のやつをテッペン、鉄板に」DEと言いかけ、S5の身振りを示した。この身振りの意図を再び『日本語どう言えばいいかわからないが動作でわかってほしい』<A>ととらえたJ5は、22「鉄板に貼って、鉄板に貼って…」と手助けしようとするが、F5の真意がよくわからず、途中で23「ええ？」QKと疑問の声を上げ、L4<笑い>に至った。これはいわば、redundancy使用の失敗・破綻例である。19では成功したのに22は失敗に終わっている事実から、次のようなことが言えるのではないだろうか。

redundancyは、相手が自分にどう働きかけているか（『動作表現でわかってほしい』<A>・要求）という、関係性の理解に関わるメタ・メッセージの把握には有効に働く（19の成功）が、より下位のメッセージである具体的な内容（この場合は、「鉄板に貼って“どうする”か」）の把握までには至らない。具体的な内容の推察は“パターン”と同義（Bateson, 1972, 佐藤訳 2000）である redundancyではなく“想像力”の領域なのであろう。

第6ペア

J6：日本人大学院生（男性）、F6：留学生（男性）

「発話のみ」の場合に比べ、「+非言語、redundancy」で見た場合、隣接ペアの成立率が大幅に増加（40ポイント）している。これは、44秒という短い会話時間の中で、非言語表現と redundancy を用いたやり取りがスピーディかつ頻繁に行われたことを示している。

04 05 [05X] 06 [06X] 07 08 [08X]
QE → ED +<D> → ED +<Q> → CC/ED +<Q>

09 S1 [09S1X] 10 11
→ EE/◎ +<A> → CC → EE

J6の04「何か目的はあるんですかね？」QEという問いに対し、F6の答えは05「磁石あるから」EEと文の前半で言い止まっておき、その先は不明である。しかしJ6はF6の後半の言葉を待つことなく redundancy によって内容を推測し、06「なんかに貼っつけるんでしょね」と「割り込み」を行っている。F6はそこに『その理解で合っているか？』という<Q>の redundancy を感じ取り、07「はい」と答えつつも、08「微妙につけにくいんじゃないですかね」と自分の見解を加えて返答している。それに対しJ6は、10「しかもこれどっかに貼ってもこれ上になんかのつたらず、こう…」EAと答え、S2:=凹み部分を指さす=という動作を行っているが、ここには、直前の08「微妙につけにくいんじゃないですかね」への「同意」／「それに対する自分の見解」／「見解の根拠となる凹み部分への注目の喚起」という3つの異なる内容が含まれている。それに対しJ6は、10「はい」CCと同意しつつ、11「べちゃんてなりますよね」EEと一気に結論まで述べている。こうした流れからこのペアの“確認・了解”のしかたには、意見を活発に出し合うとともに、相手の言いたいことを redundancy によって先取りし、そこへ自分の言いたいことを重ねて次の発言をする、という傾向があることがうかがえる。すなわち redundancy は受信者にとって、発信者が言語化しない部分を推測するためだけではなく、相手の発話を予測し先取りすること

で、次に自分の言いたいことをより有利な形で主張したり強調したりするためにも用いられる、ということが言える。

第7ペア

J7：日本人大学生（男性）、F7：留学生（男性）

redundancy 箇所が12と10組中最も多く、また秒あたりターン数も、「発話のみ」の場合と「+非言語、redundancy」の場合の両方において多い。隣接ペアの成立率、及びその増加ポイントは平均的な数値である。これらの点から、このペアでは redundancy と非言語表現が多用され、かつ活発なやりとりが行われていたことがわかる。このペアは10組中唯一、日本語と英語を交えた会話が行われたペアであった。F09がまだ日本語初級者であったことが主な原因であるが、後のインタビューによると、J7は英語が得意で英会話に抵抗がなかったという。このため途中で“つまずき”が生じてお互いの語学知識を持ち寄り、さらに redundancy を捉えることで会話が途切れず進行したと考えられる。

32 33 34 35 36 S7 [36S7X] 37 S8 [37S8X]
EE/QQ → QD/EE/EE/◎ +<A> <Q> → EE/◎ +<C>

38 S9 [38S9X] 39 40 41 S10 [41S10X] 42
→ EE/◎ +<Q> → CC/DD/EE/◎ +<Q> → KC

43 S11 [43S11X] 44
→ E/◎ +<Q> → KD

32, 33でF7に「Toy like this. Toy?」と聞かれたJ7は、35「But, こーでも、こことここ・・・」EE、36「線がー」EEと述べ、同意できない理由を説明しようとする。以降のやりとりは、37「Like a…」38「ここを、こう」39「あー、そうそうそうそう。」40「あー多分」41「あー、plate、あー、あつ、熱い」42「ウン」43「熱い（不明）、あん」44「あー」となり、記録を読んだだけの第三者には何が起きているのかほとんど理解不能である。しかし実際には非言語表現と redundancy を活用して意を通じ合っていた。すなわち、カタコトどうしの会話でも非言語表現と redundancy の働きによって了解達成は可能であることが示されていると言える。

第8ペア

J8：日本人大学生（女性）、F8：留学生（女性）

「発話のみ」による隣接ペア成立率が36.8%と10組中2番目に多い一方、「+非言語、redundancy」で見た場合の成立率増加ポイントは4.1と10組中、最も低い。これは、発話のみで頻繁に“確認・了解”がなされ、非言語や redundancy にあまり頼らずに会話が進行したことを示している。

01 02 S1 [02S1X] 03 04 05 06 S2
QI → DE/◎ +<A> → KC/QE → CC/DE/◎

[06S2X] 07 08
+<A> → QE → CC

Table 3 各組における「発話のみ」と「非言語, redundancyを加えた場合」との隣接ペア成立率比較表

第1ペア 所要時間70秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	26	26	
身振り・動作・笑いの数		9	
redundancy箇所		6	
ターン数	17	19	
隣接ペア	2	8	
ターン数における隣接ペア成立率	11.8%	42.1%	※ 30.3
秒あたりターン数	0.24	0.27	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy)における成立率) - (発話のみにおける成

第6ペア 所要時間44秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	17	17	
身振り・動作・笑いの数		3	
redundancy箇所		5	
ターン数	10	10	
隣接ペア	2	6	
ターン数における隣接ペア出現率	20.0%	60.0%	※ 40.0
秒あたりターン数	0.23	0.23	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第2ペア 所要時間36秒

	発話のみ	+非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	11	11	
身振り・動作・笑いの数		6	
redundancy箇所		5	
ターン数	6	10	
隣接ペア	3	7	
ターン数における隣接ペア出現率	50.0%	70.0%	※ 20.0
秒あたりターン数	0.17	0.28	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第7ペア 所要時間118秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	54	54	
身振り・動作・笑いの数		12	
redundancy箇所		12	
ターン数	33	34	
隣接ペア	8	16	
ターン数における隣接ペア出現率	24.2%	47.1%	※ 22.9
秒あたりターン数	0.28	0.29	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第3ペア 所要時間76秒

	発話のみ	+非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	26	26	
身振り・動作・笑いの数		13	
redundancy箇所		2	
ターン数	11	11	
隣接ペア	1	3	
ターン数における隣接ペア出現率	9.1%	27.3%	※ 18.2
秒あたりターン数	0.14		

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第8ペア 所要時間94秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	25	25	
身振り・動作・笑いの数		13	
redundancy箇所		4	
ターン数	19	22	
隣接ペア	7	9	
ターン数における隣接ペア出現率	36.8%	40.9%	※ 4.1
秒あたりターン数	0.20	0.23	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第4ペア 所要時間42秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	18	18	
身振り・動作・笑いの数		9	
redundancy箇所		5	
ターン数	13	15	
隣接ペア	3	5	
ターン数における隣接ペア出現率	23.1%	33.3%	※ 10.2
秒あたりターン数	0.31	0.36	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第9ペア 所要時間101秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	28	28	
身振り・動作・笑いの数		18	
redundancy箇所		4	
ターン数	16	17	
隣接ペア	4	7	
ターン数における隣接ペア出現率	36.4%	41.2%	※ 4.8
秒あたりターン数	0.16	0.17	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第5ペア 所要時間112秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	49	49	
身振り・動作・笑いの数		14	
redundancy箇所		5	
ターン数	22	22	
隣接ペア	5	7	
ターン数における隣接ペア出現率	22.7%	31.8%	※ 9.1
秒あたりターン数	0.20	0.20	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

第10ペア 所要時間119秒

	発話のみ	+ 非言語, redundancy	増加ポイント
発話数	52	52	
身振り・動作・笑いの数		19	
redundancy箇所		10	
ターン数	31	35	
隣接ペア	7	11	
ターン数における隣接ペア出現率	22.6%	31.4%	※ 8.8
秒あたりターン数	0.26	0.29	

※増加ポイント: (+非言語, redundancy) - (発話のみ)

このやり取りで特徴的なのは、F8 が言い詰まり、J8 が割り込んで助ける時、J8 は、04「マグネットですかね」、あるいは07「はさむの、ですかね?」と自分の推測が正しかったかどうかの確認を丁寧に行っていることである。これに対しF8 はいずれも「はい」と返答するとともに、＝一緒にG1を見る＝、あるいは＝J10の目を見てうなずく＝といった了解のサインを送っている。逆にF8の方から、15「J10さんは」、17「どうですか?」、あるいは19「どのために?」と、発話によって明確に質問する場面がある。

15 S4 16 17 18 19 20 21 22
QQ/◎ → QK → QI → KD → QQ → DD/QE/DE

このように、“丁寧に”“明確に”確認や了解を行おうとする両者の傾向が発話による隣接ペアの成立に寄与していると推測される。メッセージのあいまいさを避けようとする話者が、意識的に丁寧に明確な発話をすることによって redundancy の出現を抑制したとも考えられる。

第9 ペア

J9 : 日本人大学院生(女性), F9 : 留学生(女性)

「発話のみ」の場合の隣接ペア成立率が高く、「+非言語, redundancy」で見た場合の増加ポイントは少ない。また秒あたりターン数が「発話のみ」の場合と「+非言語, redundancy」の場合の両方において10組中2番目に少ないことから、このペアでは一方の発言が比較的長く、ターンが少なかったと言える。注目すべきは以下のやりとりである。

04 05 06 07 08 09 S1 [09XS1]

EE/KK → EE/QE → DD/EE/◎ +<A>

10 [10X] 11
→ EE +<Q> → ED

ここではF9が04「なんか…こちらはゴムですけど」と品物を手に取ったのを見て、J9が06「そのブニョブニョするのがなんか…」07「あ、そこに指入れるのかな?」と提案する。それに対しF9が08「わかりません」09「でも、指が…」と文の前半を言いかけて実際に指を入れてみる。それを見てJ9が10「…ちょうど入りますよね」と割り込んで文の後半を完成させ、F9は11「はい、入れやすいです」と感想を述べる。2人の行動と発話があたかもパズルのように交互に組み合わせられて1つのまとまった了解が達成されている。redundancy のコーディングを行うと、07から11に至る3回のやりとりの全てが隣接ペアを構成していることがわかる。これは了解の達成において、非言語表現と redundancy の両方が有効に用いられたことを示している。

第10 ペア

J10 : 日本人大学生(女性), F10 : 留学生(男性)

このペアは redundancy 箇所が10組中最も多い。これは「えー」というあいまいな発話がJ10には33発話中4回、F10には25発話中2回見られ、これらに含まれる redundancy を筆者が解釈したことによる。

19 20 [20X] 21 22 S3 [22S3X] 23 S4
QA → KD +<C>/QE → KD/◎ +<Q> → KD/◎ +
◆ ◆
[23S4X] 24 L3 25 26 27 S5 [27S5X]
<D>/QQ/※ → DD/AA → KD/◎ +<D>
◆

20, 22, 23, 27の4箇所で「えー」(KD)という発話が用いられているが、このうち筆者が設定した redundancy 評定の定義、「受信者がその部分に対して redundancy にもとづくと思われる発話応答をしていること」にあてはまるのは22だけである。しかし、ここでの両者の「えー」の連続は意味の共同構成における同調表現(Hardin & Higgins, 1996)とも考えられ、同調による省略のために実意的意図が見えにくくなっているのではないかと考えられた。そこで全ての「えー」について文脈に沿って redundancy を付加してみると、20-J12は『(えー) 本当だ』<C>, 22S3Xは『(えー) なんだろう?』<Q>, 23S4Xは『(えー) わからない』<D>, 27S5Xは『(えー) じゃあ触ってみよう』<D>と、それぞれに異なる意味があてはめられていることが推測される。このペアでは他の箇所でも発話や動作の同調が多く見られた。

すなわち、同調がよく見られるような、了解がうまく成立し、理解しあえている会話においては、用いる表現のバリエーションが少なくても(この場合で言うと“えー”という同じ表現を繰り返し使う)自在に意味を伝えることができる。それは互いの redundancy が的確に作用しているからであると考えられる。

4. 仮説と考察

4.1 仮説

実験の結果から、会話の発話されない部分において redundancy が運んでいる“意味”について、以下の仮説を立てた。

仮説1 : redundancy は発話されない部分においても隣接ペアを成立させることで了解の成立に寄与する。

会話における了解には、非言語表現と共にメタ・メッセージとしての redundancy による推測が有効に用いられている。それは、一方の話者が発した不完全な発話文をもう一方の話者が補うという協同作業であり、独り言のような自己完結した発話であっても、また一語ずつの短いやり取りであっても、受け手が redundancy を捉えてそこに自分への働きかけを察知し、意味を見出して応答したならば、隣接ペアが成立して了解に結び付く(例：①ペア点線部)。

仮説2 : redundancy による了解の成立経緯が会話時の話者の関係性を反映していたり、逆に了解成立の経緯がその後の話者の関係性に影響したりと、了解成立経緯と話者の関係性には双方向性が見られる。

了解がスムーズになされている会話では、発話・非言語に関わらず、表現のバリエーションが少なくても互いの意図を自在に伝えることができている。それは、関係性の枠組が安定していて互いに相手の意図に沿った redundancy を的確に捉えられるからである(例：⑩ペア点線部)。また、やり取りの中で redundancy に頼った省略が行われるのは、「省略しても通じる」という相手との信頼関係を意味しているとともに、そうした関係を強化、反復し、確認し合っ

いる行為と言える。(例：④ペア点線部) 一方で、片方の話者が会話の成り行きを予め決めている場合は、redundancy を捉え会って互いに“確認し合う”“了解し合う”という対等な協同作業は減り、その代わり“一方からの説得や誘導に対する他方の納得や同意（不同意）”といった不均衡な関係が生じやすい。(例：③ペア点線部) また、redundancy を捉えるということは、相手の意図を把握するためだけではなく、それを先取りすることで次に自分の言いたいことを有利に主張したり強調したりすることにもつながりうる。このように会話上の戦略という意味も redundancy には含まれている。

(例：⑥ペア点線部)

仮説3：構造が明確な「拘束力の強い」発話は redundancy の生じる余地を抑制する。

意図のわかりやすい発話がなされると、聞き手は発話内容に集中するため、並行して発信されている非言語や redundancy といったメタ・レベルのメッセージへの注意は後退する。逆に言うと、メッセージがあいまいになることを避けるために話者が意識的に丁寧で明確な発話をし、redundancy を抑制することがある。(例：⑧ペア点線部)

仮説4：redundancy によって把握できる意味はあくまでもメタ・レベルのものである。

redundancy による隣接ペアの成立経緯からは、相手が自分にどのような働きかけを行っているか（質問なのか依頼や命令なのか、近づこうとしているのか遠ざけようとしているのか、など）というメタ・レベルでの関係性は把握できるが、それより下位の、メッセージ内容の詳細までは把握しきれない。(例：⑤ペア点線部) それは想像力の領域であったり、より実際的には発話による確認が必要な点であったりするが、日常においてもしばしば redundancy によるあいまいな把握のまま済ませてしまい、相手の真意を汲むことに失敗することがある。

4.2 考察

以上の仮説群は、redundancy が会話の進行にどのように関わっているかを説明するものであるとともに、Bateson の「われわれは他者との関係に関する自分の見解の正しさを確認を求める。」(Bateson, 1972 佐藤訳 2000, p. 205) という言葉とも符合する。人は redundancy を捉えることで会話の空白や欠落部分を埋める内容を推測すると同時に、隣接ペアを成立させる（あるいはさせない）ことにより、「あなたと私の関係」(Bateson, 1972 佐藤訳 2000) をどう理解しているかを相手に伝え、了解の成否を確認する。これがいわゆる“暗黙の了解”といわれる相互作用のしくみであり、redundancy が運んでいる意味であると言える。

全ペアに共通する話者2人の関係性は、“初対面であること”、“日本人大学生と外国人留学生であること”、“共に実験協力者であること”、“目の前の品物が何であるかについて話し合うという課題が与えられていること”の4点であった。これらの同一条件のもと会話が行われたが、開始以降、それぞれのペアごとに個別に発生した事情・状況・関係性によって多様な形で redundancy が観察された。すなわち redundancy は関係依存であるだけではなく状況依存的にも捉えられると推察される。

受信者が redundancy を捉えて隣接ペアを形成し応答するのは、相

手から自分への暗黙の働きかけを察知し、それに応じる、応じない、また応じるとしたらどう応じるか、といった“選択と決定”を手にするためと考えられる。受信者が了解の達成に向けて協力的な言動を返せば了解はスムーズに達成されるが、逆に受信者が了解の達成に消極的で、相手からの働きかけを察知しても、それを無視したり拒否したりすれば、達成はなされない。その意味で、了解が達成されるか否か、すなわち会話の方向性は、受信者の redundancy の捉え方とそれによる選択で決まる。

言いかえると、redundancy とは「受信者ないし発信者それぞれが自分の経験に則して回帰的に捉える意味」であるばかりでなく、そこにはしばしば「相手との了解の成立を志向する隣接ペア的構造」が埋め込まれており、その動的要素が会話の流れ、すなわち話者間の関係性を方向づけているのである。この場合の了解とは、その場で現在進行している関係のパターンについての了解であり、これを互いに承認しあうことで引き続き同じパターンにもとづいて意味が再生産されていく。redundancy をどう捉えるかが関係性のあり方を左右するが、また逆に、関係性のあり方が redundancy の捉え方に反映されてくる。本研究においては、発話されない部分において作動している意味と構造のダイナミクスが、そうした redundancy と関係性との双方向性を導いているということが示された。

では心理面接会話における redundancy についてはどう考えればよいだろうか。親子、夫婦といった親密な間柄では redundancy は疑う余地のない了解事項として会話の中に織り込まれ、それによる拘束が関係を硬直化させがちである。その固定化したパターンに介入することに意義があるとして、「過度の冗長性 (Watzlawck, Beavin, & Jackson, 1967 山本監訳 2007) を帯びた相互作用は悪循環を起こしがちで関係を硬直化させるが、冗長性を帯びているからと言ってそうではない場合もあり、これを良循環とみなし、良循環の冗長性を高められるよう、また、悪循環の過度の冗長性が低められるよう支援する」(花田, 2010) というのが Bateson ら MRI グループによる家族・短期療法の治療原理である。redundancy 概念はとするとこの家族・短期療法の分野に限定して用いられがちである。しかし、会話構造の観点から心理面接を分析した先行研究が挙げている「セラピー的会話」の特徴を見れば、redundancy 概念をより広く応用する余地があることがわかる。特徴の1つとして言われていることは、セラピストの反応は、先行するクライアントの発話行動と強く結びついていると同時に後続のクライアントの発話はある程度予期したものになっており (Perakyla, et al., 2008), クライアントの語りの結節点としての役割を果たしているという点である。またセラピストは会話に対し様々な介入を行う必要から、ターンテイキングをコントロールしたり、クライアントの語りを治療的意義に沿ったものに形づくろうとするといった、クライアントにはない権利を持つ場合がある (ibid.)。さらに Perakyla (2008) は、クライアントとセラピストの関係が会話の瞬間ごとに近づいたり離れたたりすることを逐語録の分析から発見している。すなわち心理面接においては、会話の参与マネジャー (Anderson & Goolishian, 1988) としてのセラピストの微細な反応や発話あるいは沈黙が会話の進行に多大な影響を及ぼしていることが実証されており、そこで作動しているであろう意味と構造のダイナミクスに着目する必要がある。

本研究で得られた仮説によると、話者相互の redundancy が了解の

アクションである隣接ペアの成立に大きく関わっている。隣接ペアは、関係を安定させる効果がある一方で、「早わかり」によって自らの望む方向にのみ関係を導いてしまう危険性を伴う。土居は Bion の言を紹介して、「セラピストは常に患者に初めて会うごとき心がけが肝要であるが、それはすなわち、これまでどうであったかとか、今後どうなるかではなく、今この場で患者と自分との間で何が起きているかに注意することである。そうすると必ずそこに新しいことが出て来ていることに気付く」（土居, 1992）と述べている。本研究の結果を用いるならば、セラピストの心がけるべき点の1つとして、redundancy に埋め込まれた了解の構造を踏まえて会話することでクライアントとの間に「安定的でありつつ早わかりはしない」関係を保ち、発話されない部分にもひそんでいるかもしれない「わからない何か」を発掘すること、が挙げられるのではないだろうか。

引用文献

- Anderson, H., Goolishian, H.A. (1988). Human systems as linguistic systems: Preliminary and evolving ideas about the implications for clinical theory. *Family Process*, **27** (4); 371-393.
- Bateson, G. (1972). *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology*. San Francisco, Scranton, London, Toronto: Chandler Publishing Company.
- (ベイトソン, G. 佐藤良明 (訳) (2000). 精神の生態学 思索社)
- 伝康晴 (2009). 隣接ペア. 坊農真弓, 高梨克也共編, 人工知能学会編集, 多人数インタラクションの分析手法 (2009). オーム社出版局 pp. 82-94.
- 土居健郎 (1992) 新訂 方法としての面接 臨床家のために 医学書院
- 榎本美香 (2009). ターン構成単位. 坊農真弓, 高梨克也共編, 人工知能学会編集, 多人数インタラクションの分析手法 (2009). オーム社出版局 pp. 68-81.
- 花田里欧子 (2010). パターンの臨床心理学—G. ベイトソンによるコミュニケーション理論の実証的研究— 風間書房
- Hardin, Curtis D. & Higgins, E. Tory. (1996). Shared Reality: How Social Verification Makes the Subjective Objective. In Sorrentino, Richard M. & Higgins, E. Tory (Ed.), *Handbook of Motivation and Cognition vol. 3: The Interpersonal Context*. New York, London: The Guilford Press, 29-84.
- Labov, W. & Fanshel, D. (1977). *Therapeutic Discourse: Psychotherapy as conversation*. Orland: Academic Press.
- 小川一美 (2008). 会話セッションの進展に伴う発話の変化: Verbal Response Modes の観点から 社会心理学研究, **23**, 269-280.
- Perakyla, A., Antaki, C., Vehvilainen, S. and Leudar, Ivan. (2008). Analysing psychotherapy in practice. In Perakyla, A., Antaki, C., Vehvilainen, S. and Leudar, Ivan. ed. (2008). *Conversation Analysis and Psychotherapy*. New York: Cambridge University Press.
- Perakyla, A. (2008). Conversation Analysis and psychoanalysis: Interpretation, affect, and intersubjectivity. In Perakyla, A., Antaki, C., Vehvilainen, S. and Leudar, Ivan. ed. (2008). *Conversation Analysis and Psychotherapy*. New York: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emmanuel. & Sacks, Harvey. (1972). Opening up Closings, *Semiotica*, **7**. 289-327.
- (エマニュエル・シェグロフ&ハーヴィー・サックス. 会話はどのように終了されるのか 北澤裕・西阪仰 (訳) (1995). 日常性の解剖学—知と会話— 新版 マルジュ社 pp. 177-241.)
- Stiles, William B. (1992). *Describing Talk: A Taxonomy of Verbal Response Modes*. Newbury park, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Tannen, D. (1984). *Conversational Style: Analysing talk among friends*. Norwood, NJ: Ablex.
- Tannen, D. (1986). *That's not what I meant! How conversational style makes or breaks your relations with others*. New York, NY: Morrow
- Watzlawick, Paul, Bavelas, Janet Beavin, Jackson, Don D. (1967). *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. W.W. Norton.
- (ポール・ワツラヴィック, ジャネット・ベヴン・バヴェラス, ドン・D・ジャクソン. 山本和郎 (監訳) 尾川丈一 (訳) 第2版 (2007). 人間コミュニケーションの語用論 相互作用パターン, 病理とパラドックスの研究 二瓶社)